研究ノート

ラフカディオ・ハーンと柳宗悦

―共感と共生の異文化理解―

那須野　絢　子

Ayako NASUNO. Lafcadio Hearn and Yanagi Muneyoshi: Sympathy and Symbiosis between Othercultures. *Studies in International Relations* Vol. 39, No. 2. February 2019. pp. 57-64.

Lafcadio Hearn (1850-1904) came to Japan in 1890 and wrote about life and belief of Japanese people to introduce them toward the Western world. He married a Japanese woman and became naturalized in Japan. On the other hand, Muneyoshi Yanagi (1889-1961) is a person who is an inceptor of Japanese folk art movement. He was attracted by Korean craft and visited many times the Korean Peninsula under the Japanese rule. He contributed to the opening of a museum of folk arts in Korea in 1924.

Although they never met during their lifetime, their works have similarity in intercultural understanding. Both had contact with foreign people and were finding local exotica and religion, they understood them with sympathy and symbiosis.

This treatise focuses on their common ideas behind their intercultural understanding which occurred not by politics or diplomacy but by art, literature and religion.

1. はじめに

ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn, 1850-1904）は、アメリカにおける記者時代、日本文化に関心を抱き、1890年、ルポライターとして来日、滞日中に日本を取材した13冊の著書をアメリカ及びイギリスで発表した。また、日本人女性と結婚をし、日本に帰化、小泉八雲という名前を得て、日本の土地で終焉を迎えた。

本稿においてハーンの比較対象として扱う柳宗悦（1889-1961）は、朝鮮の美術文化に魅了され、当地の文化芸術に親しむために、日本統治下の朝鮮半島を度々訪れ、各地を旅しながら、庶民の生活の中から生まれた工芸品を蒐集してまわった。そして、朝鮮の民衆の手により育まれた文化が、日本統治により失われていくことを嘆き、その保存と伝承のために、1924年、李朝の王宮であった景福宮の一角に「朝鮮民族美術館」を設立した。

柳とハーンが活躍した19世紀末から20世紀初頭は、帝国主義が台頭し、列強各国が植民地の拡大を競い合った時代であった。こうした時代の潮流を受け、日本国内においても、富国強兵、殖産興業を掲げ、列強に対抗する近代的軍事力の増強を目指した帝国主義思想が強まっていった。このような世界情勢が複雑に絡み合う時代において、ハーンと柳は、当時社会を動かす原動力であった政治や外交の目的ではなく、文化芸術、及びそれらを生み出したその国の人々との親交により異文化と接したのである。本稿は、このような両者の異文化交流に共通する姿勢と、その背後に在る思想の中にみられる二つの共通要素を、それぞれの文芸活動の中から拾い出したものである。

2. 共感を伴う異文化との接触
― ハーンの日本、柳の朝鮮 ―

はじめに述べたとおり、ハーンと柳は共に、異文化に触れ、その文化の紹介、保存、継承に努めた人物である。ハーンは来日前のアメリカ時代にすでに異文化に強い関心を寄せ、太平洋の島々やエジプト、中国に伝わる民話、伝説の再話や、クレオールの研究に熱中し、それらに関する著書を発表している。そんなハーンと日本の直接的な出

会いは、1884年、新聞記者として、ニューオーリンズで開催された「万国工業兼綿花百年記念博覧会」における日本館の取材にあたったことだろう[1]。ハーンは、1885年出版の *Harper's Weekly, January 10th* に寄せた記事の冒頭で、"The attention of the visitor to the Main Building is apt to be especially attracted at the present time by the Japanese exhibit, which is already much more nearly complete than any other Oriental and than most European displays."[2] と記し、以下、日本の陶磁器や青銅器などの古美術品を、古代ギリシアやローマのそれと比較しながら称賛した。

この取材を契機に、異文化の関心が極東日本にまで及んだハーンは、日本取材の企画書をニューヨークのハーパー社へ提出、その強いアプローチが功を奏し、同出版社との契約で日本行きの切符を手にするのである。

ハーンは日本取材の賜物として、13冊の著作を世に出すに至るが、それらが、同時代に来日し、日本を記した数いる西洋人のそれとは一線を画すものであることは特筆に値する。ハーンのどのような姿勢が彼の日本取材を特殊なものにしたかについては、日本行きが決まったハーンが、その意気込みをニューヨークの出版担当者に語った以下の言葉、"The studied aim would be to create, in the minds of the readers, a vivid impression of living in Japan, －not simply as an observer but as one taking part in the daily existence of the common people, and thinking with their thoughts."[3] に集約されているといえる。この言葉のとおり、日本時代のハーンは、好んで和服に身を包み、日本家屋の居を構え、煙管や日本の怪談を愛好した暮らしの中で、日本文化、日本人への共感を抱きながら、日本を素材とした作品の中に西洋的なフィーリングを融合させた独自の文学を創り上げていった。特に、日本での最初の赴任地である島根県と、晩年の避暑地である静岡県においては、各土地の民俗を、同地での生活の中で取材し、"Kitzuki: The most Ancient Shrine in Japan", "In the Cave of the Children's Ghost", "By the Japanese Sea" (*Glimpses of Unfamiliar Japan*, Houghton, Mifflin & Co., 1894), "Otokichi's Daruma", "Drifting", "Beside the Sea" (*A Japanese Miscellany*, Little, Brown & Co., 1898) といった作品を残している。

一方の柳と朝鮮との出会いは、彼がまだ帝大の学生であった頃まで遡る。東京神田で偶然見つけた朝鮮の牡丹紋の古壺に強く惹かれ、当時としては大金であった三円を払って購入したことがその始まりであった。この古壺を購入してしばらく経った頃、朝鮮の工芸に造詣の深かった浅川伯教(1884-1964)[4] が、我孫子の柳邸を訪れた際に、柳の朝鮮美術への関心はさらに膨れ上がり、浅川とともに「朝鮮民族美術館」の設立を決意した[5]。このような出来事が契機となり、1916年８月、柳は朝鮮の美を求めて、半島に渡ることとなるのである。

以降、柳は朝鮮各地を旅し、李朝陶磁の蒐集活動を繰り広げていくのであるが、陶磁器の美に対する彼の関心は、次第に、その美を作りだした朝鮮の人々の発見と、彼らに対する深い共感へと広がっていくようになる。そして、朝鮮人を日本人として教育しようとした日本統治下の同化政策は、朝鮮が育んできた固有の伝統を奪うものであると、柳の激しい怒りを誘った。1919年３月１日、日本統治下における最大の民族運動である三・一独立運動が起こると、柳は朝鮮の独立を支持する「朝鮮人を想う」を執筆し、同年５月20日から24日まで『読売新聞』に連載した。その冒頭の一部を下記に抜粋する。

> 他国を理解する最も深い道は、科学や政治上の知識ではなく、宗教や藝術的な内面の理解であると思ふ。（略）余は日本に於いての小泉八雲（Lafcadio Hearn）の場合の如きをその適例であると思つてゐる。（略）朝鮮に住み朝鮮を語る人々の間にはまだハーンのやうな姿は一人もないのである。その古墳を発き古藝術を集める人はあるかも知れぬが、それによって朝鮮に対する愛の仕事を果たした人は一人もないやうである[6]。

柳がこのエッセイの中でハーンについて言及したことは、朝鮮人とその文化に向かった彼の姿勢が、ハーンが日本と日本人に向かった姿勢と同じ方向を向いていたことを示している。また、大東俊一の論文「柳とハーン」には、柳が学習院高等科に入学した頃にハーン作品と出会い、その後、ハーン作品に親しむようになった経緯が記されており 、柳がハーンの文学と人生に対して並々ならぬ共感を覚えていた事実が確認できる。

上述のとおり、ハーンと柳の異国における取材には、対象とした文化を有する民族の生活に分け入り、共感の念を以てその文化を理解しようと試みた、偏見に囚われることのない姿勢が共通して存在した。以下、このような両者の異文化理解の背景に在る、思想としての共通点を取り上げていく。

3. 自我の否定と他力の肯定

まず、二人に共通する思想として、「自我の否定と他力の肯定」を指摘する。柳は、無名の職人から生まれた素朴な工芸品に美と価値を見出したが、無名の職人たちに働きかける他力について、著書『美の法門』（1949年３月21日、日本民藝協会より刊行）において自身の哲学を披露している。その中で、他力の実態の一つとして「伝統の力」を挙げ、「伝統とは多くの祖先たちの経験や知恵が積み重なつたものである。」とし[8]、その伝統を職人たちに継承させる更なる力として、「仏の計らい」の存在を唱えている[9]。

阿満利麿が、「柳宗悦は、美と宗教は同根だと主張した。（略）深い美があるとすれば、必ずそこには深い宗教心が作用していると考えている。[10]」と指摘したように、柳は、仏の力（宗教の力）が作用することで、職人たちは過去から引き継がれる伝統を継承することができ、結果、作者自身が持つ知識や思惟とは無関係に美しい物が生み出されると考えたのである。これに呼応する記述が、日本においてハーンが最初に記した作品 "My First Day in The Orient" (*Glimpses of Unfamiliar Japan*, Houghton, Mifflin & Co., 1894) の中にみられるため以下に引用する。

> And every artist is a ghostly worker. Not by years of groping and sacrifice does he find his highest expression ; the sacrificial past is within him ; his art is an inheritance ; his fingers are guided by the dead in the delineation of a flying bird, of the vapors of mountains, of the colors of the morning and the evening...[11]

ここでハーンは、すべての職人、芸術家たちには、今は亡き前代の名匠らの記憶が内在し、その記憶が作用し、伝統を継承していく力となると説き、ハーバード・スペンサー（Herbert Spencer 1820-1903）の進化論に影響を受けた独自の哲学「遺伝的記憶」[12] を披露している。また、絵画や建築物などの優れた芸術作品に関しても、それを生み出した芸術家たちの背後に遺伝的記憶が作用していることを主張し、*The Value of the Supernatural in Fiction* と題した東京帝国大学での講義（年月日不明）の中で、"I do not remember to have seen in any books, but which is of very great philosophical importance; there is something ghostly in all great art, whether of literature, music sculpture, or architecture."[13] と講じている。

このように、柳にとっての「宗教の力とその作用から生まれる伝統の力」、ハーンにとっての「伝統を生み出す過去に生きた亡霊の記憶」、これら目に見えない存在の力添えゆえに、職人や芸術家たちは美しいものを生み出し得ると、両者は考えたのであるが、こうした他力を肯定する哲学の延長線上には、自我を否定する思想が生まれてくることは自然な成り行きであろう。柳は、著書『宗教とその真理』（1919年２月27日、叢文閣より刊行）において、他力の正体に「実在」という言葉を与えて表現し、美しい工芸品が生み出される際に起こる、自我や個性の消滅を主張している[14]。同書において柳は、「信仰は神に對する無限の追慕である、信仰は最も温かい理解である。理解とは愛の情である。愛こそは実在である。[15]」と述べ、さらに「差別の世界」を生み出す「思惟

の世界」を、実在と相対する「形態の世界」であるとし、「生命の至上要求として十全であるべき実在は、一切の対当的区画を絶滅した第一義のものであらねばならぬ。[16]」と、他力の肯定から導かれる自我の消滅を説明している。

ハーンも同様、上記した「遺伝的記憶」を肯定した結果として起こる自我の否定を作品の中で度々訴えており、その二つの例を以下に引用する。

① There are men born blind; but the normal being inherits some ideal of beauty. ... it represents an accumulation of countless impressions received by the race, ...[17]

② The beauty we speak of has no real existence: the emotion of the dead alone makes it seem to be,—the emotion of those long-buried millions of men and women who loved Nature for reasons very much simpler and older than any æsthetic emotion is.[18]

①②の内容は、「我々は前世に生きた人間の無数の記憶の結晶でできているのであり、現世に生きる人間が個々に抱く「美の理想」とは、個人のものではなく過去に生きた一民族が受けてきた感銘の集積なのである」とまとめられる。ハーンは初恋で抱く感情、優れた芸術作品、個人の趣向など、感情も含めた人間が生み出すすべてのものが、過去の亡霊の仕業であると考えたがゆえに、個性や自我の存在を強く否定したのである。また、*Gleanings in Buddha-Fields* (Houghton, Mifflin & Co., 1897) に収録された "Nirvana" では、欧米において、絶対の無、完全な寂滅と考えられている仏教における涅槃の解釈を否定し、"the extinction of individual sensation, emotion, thought, —the final disintegration of conscious personality, —the annihilation of everything that can be included under the term"I,"..."[19] と自我の観念の消滅を意味する涅槃の解釈を主張している。

上記のとおり、他力を肯定し、自我を否定したハーンと柳であるが、両者が否定した自我とは、近代ヨーロッパ社会を支え、明治維新後の日本にも受入れられつつあった近代的自我ととらえることができる。ハーンは上で挙げた "Nirvana" において、近代的自我によって生まれる「性格、身分、階級、信条の区別」が、多くの人間の不幸を引き起こしていることを指摘し、このような事態を救済するには自我の消滅が不可欠となってくることを論じている[20]。一方の柳も、『宗教とその心理』に記された「自我についての二、三の反省」の中で、文明開化の余波で日本においても台頭した近代的自我の概念を否定し、それらにより引き起こされる「自己を中心とする欲望、利己のための排他の努力、征服の欲求、富裕への奴隷、掠奪の行為」を咎めている[21]。

柳が「実在はあらゆる差別相を駆逐し滅却する[22]」と考えていたことからも解るとおり、ここで考察した、他力を肯定し、自我を否定する思想を持ったハーンや柳にとって、肌の色や容姿、社会的地位といった人間の個性、自我を形成する表層的要素は、何の意味も持たぬ、取るに足りないものであった。はじめに記したとおり、帝国主義の拡大で国と民族が、強弱、優劣で位置づけられ、対峙した時代において、ハーンと柳は、他力を肯定し、近代的自我を否定することで、異なる民族や文化に対する偏見、個性による人間の差別化という概念を、彼らの中から消滅させたのである。

4. 融合と共生の夢

ハーンと柳に共通する思想の二つ目として、同節では「融合と共生の夢」を指摘する。

異文化とは、生活様式、習慣、考え方などが、自身の所属する地域のものとは異なる文化を意味する。その異文化に対して、共感を伴う理解を示し、異国における取材を行った二人であるが、その背景には、異質なもの、相対するものが互いに良い影響を与え合いながら融合し、共生していくことを理想とする共通の信念が存在した。

ハーンに関しては、来日後、西洋文明の急速な流入によって古い日本の仕来たりや伝統が失われていく現実に直面したことや、アイルランドやイギリスで経験した両親の離婚、親戚の裏切りといっ

た幼少期の不幸が、キリスト教が支配する西洋世界に起因すると考えたことから、西洋文明を一方的に否定する感情的な発言が友人への書簡などに再々現れることがあった。加えて、文学的な麗句を用いて日本を賛美した作品から、ハーンは時として日本人の民族主義に訴える存在として位置づけられるケースがある。しかし、ハーン文学が真に意図したものは、このようなナショナリズムとは無縁であり、東京帝国大学や早稲田大学で講義を行った彼の英文学者としての側面やその講義内容を考察すれば、このことがよく理解できる。ハーンは、帝大最後の講義において、将来の日本文壇を担うであろう学生たちへ向け、"This is the period of assimilation; later on the fine result will show, when all this foreign material has been transmuted, within the crucible of literature, into purely Japanese materials."[23] という言葉を贈り、西洋文学の思想や感性を存分に吸収し、それを純日本的な要素の中に融合させることで、これからの日本文学はさらにすばらしいものとなり得ることを訴えた。また、アメリカの雑誌に寄稿した "China and the Western World" (*Atlantic Monthly*, 1896) には、以下のような記述がみられる。

> The evolutional trend would seem to be toward universal brotherhood, without distinctions of country, creed, or blood. It is neither unscientific nor unreasonable to suppose the world eventually peopled by a race different from any now existing, yet created by the blending of the best types of all races...[24]

上で引用した帝大での講義の一節に現れた、異なるものの融合に理想を見出したハーンの哲学を、少々極端ではあるが、端的に表現している内容として特筆に値するものといえる。要約すると、西洋人がこれまで成し遂げてきた、強者による弱者の吸収を批判し、国、信仰、血族の優越性とは関係なく、異なる民族が、それぞれの良い要素を融合させることが出来るのならば、その暁には最良の種族が誕生する、という内容の主張であり、利己主義の副産物であるあらゆる偏見が消滅し、人類が無我へ進んでゆくことが最高の進歩だという結論でこのエッセイを締めくくっている。ここで挙げた「東西文学の融合」、「異なる民族の融合」の例の他にも、優れた音楽に見られる「低音と高音の融合」、完成された人生に見られる「快楽と痛みの融合」など、ハーンは相対する要素が溶け合い一つのものとなることで、優れたもの、完成されたものが生まれ得ることを、自身の作品の中で度々主張している。

一方の柳も、ハーン同様、異なるものの融合と共生の夢を説いたことはすでに述べたとおりであり、柳の著書からは、上記のようなハーンの思想と呼応する部分を見つけ出すことができる。以下は、柳の著書『宗教とその真理』の序文にみられる一節である。

> 人は久しい間、東西の結合を夢見た。然し此の理想は先ず宗教的真理の上に安定されなければならぬ。（略）一宗の存在が只他宗の排斥によつて保たれるのは醜い事実であろう。多くの宗教はそれぞれの色調に於て美しさがある。然も彼等は矛盾する美しさではない。野に咲く多くの異る花は野の美を傷めるであろうか。互いは互いを助けて世界を単調から複合の美に彩るのである[25]。

「互いは互いを助けて世界を単調から複合の美へ変える」という主張は、来るべき未来の在るべき姿を、The period of assimilation（融合の時代）と記したハーンの言葉に秘められた想いそのものと一致する。中見真理は、著書『柳宗悦―「複合の美」の思想』において、このような柳の相対するものの相互扶助の理想は、「「東洋と西洋」、「仏教とキリスト教」、民芸運動における「個人作家と工人」、さらには日本と朝鮮、ヤマトと沖縄やアイヌ、「地方と中央」、「手仕事と機械」の関係にも及んでいた」と指摘している[26]。

このように、ハーンも柳も、異なる物を排斥することや、文化や人種間に優劣を定め、強者が弱者を支配する形での統合を肯定せず、異文化の持

つ価値と、異なるもの同士が共生することにより生まれる相互作用の有効性を、偏見にとらわれることなく認めることが出来たのであった。その背景には、第3節で取り上げた、他力の肯定による自我の否定の延長上に開けてくる、異なるものの融合と共生を理想とする共通した思想が存在したのである。

5. 結び　ーハーンと柳が成し得たものー

3節、4節で指摘した、ハーンと柳の共感を伴う異文化理解の背後に存在した「自我の否定と他力の肯定」と「融合と共生の夢」、この二つの思想は、彼らが生きた時代の潮流の中で、中心ではなく周辺に位置する文化、顧みられることもなく、ともすると差別の対象ともなった民族の生んだ文化に共鳴し、異なる文化の共生に価値を見出す精神を生み出すものであった。そして両者は、その価値を後世に語り継ぐべく、自身の文芸活動をとおして訴え続けた。

ハーンは、アメリカでのジャーナリスト時代,西洋文明に侵されつつあった黒人やクレオールの文化を精力的に取材し、新聞記事や著作に記した。その後太平洋を渡り、西洋を中心とした世界から見る東の果ての国日本を、作家として西洋へ紹介する功績も残した。一方の柳は、日本の植民地政策により失われつつあった朝鮮の美術を蒐集し、「朝鮮民族博物館」を建設、また、当時正当とは見なされなかった沖縄、アイヌの民俗の価値を訴え、無名の工人の生み出す民衆の工芸に美を見出し、それらに「民芸」という名称を与えた。1936年、柳は東京・駒場に自身の蒐集した民芸品を展示する「日本民芸館」を設立し、彼の民芸運動[27]の心を継承し、発信する拠点として現在に至っている。

そんな柳は、当時日本が進めていた植民地支配に伴う、朝鮮文化の日本同化政策を痛烈に批判し、1922年、日本の朝鮮総督府が景福宮の正門である光化門を壊し、総督府庁舎の建設を推し進めようとした際、「失われんとする一朝鮮建築のために」(『改造』大正11年9月号掲載）を発表し、以下のようにその心境を吐露している。

> 光化門よ、光化門よ、お前の命がもう旦夕に迫ろうとしてゐる。お前が嘗てこの世にゐたと云ふ記憶が、冷たい忘却の中に葬り去られようとしてゐる。（略）誰もが言葉を躊躇してゐる。併し沈黙の中にお前を埋めて了ふのは私には余りに悲惨だ。それ故云い得ない人々に代つて、お前の死に際しもう一度お前の存在を此世に意識させる為に、私は此一篇を書きつらねるのだ[28]。

この柳の切実なメッセージが大きな反響を呼び、光化門が破壊を免れたことは、彼の活動が形として結実した大きな実例といえる。柳はこのような生前の朝鮮文化保存の功績が認められ、1984年、韓国より宝冠文化勲章を授与された。

この事例と類似したものとして、ハーンにもまた、彼の日本文化論が敗戦後の天皇制存続に影響を与えたというエピソードが残されている。天皇制が廃止されず存続された背景には、GHQの最高司令官であったマッカーサーに、彼の腹心の部下であったボナー・フェラーズが提出した文書「最高司令官あて覚書」の存在があった。ハーンの愛読者であり、ハーン作品をとおして日本を理解しようとしたフェラーズの覚書には、ハーンが *Gleanings in Buddha-Fields* や *Japan: An Interpretation*（Macmillan Co., 1904）などの著作において日本の神について論じた内容と呼応する以下の言葉が綴られている。

> 天皇に対する日本国民の態度は概して理解されていない。キリスト教徒とは異なり、日本国民は、魂を通わせる神をもっていない。彼らの天皇は、祖先の美徳を伝え民族の生ける象徴である[29]。

東野真は、著書『昭和天皇二つの「独白録」』において、アメリカ国務省は、戦後の対日占領政策における天皇制の扱いを1942年頃から検討しており、その中でマッカーサーは、天皇制続行に前向きな考えを示しながらも、天皇を戦犯にすべきかの公式な態度は表明せず、日本に詳しいフェラーズに、この問題の詳細な検討を命じたと記し

ている[30]。このことを踏まえると、マッカーサーの天皇制続行の決断が、フェラーズの覚書に全面的に因るものであったと言い切ることはできない。しかし、この覚書がマッカーサーに、その決断に踏み切る一つの契機を与えたことは確かな事実であり、ハーンの日本理解が、天皇制という伝統の保存、継承に寄与した事例として採り上げることができる。平川祐弘は、著書『平和の海、戦いの海』において、フェラーズの覚書について以下の様に記している。

> 西洋人で神道に深い理解を示した作家はハーンをおいて他にない。彼ほど巧みに神道のカミがゴットと違うことを説明してくれた人はいない。（略）フェラーズがもしかりにハーンではなくてチェンバレンの『日本事物誌』やその付録として添えられた『新宗教の発明』などを読んでいたら、「天皇に関する覚書」はあるいは別様の色調を帯びたかもしれない[31]。

また、ハーンの孫にあたる小泉時の手記によると、1930年、フェラーズは夫人を伴い、始めて新宿の小泉家を訪れ、それ以降、小泉家との長きに渡る交流が続いたという[32]。その他、筆者がフェラーズの紹介でGHQの通信大隊司令部に勤務したことをはじめとする、同書に綴られた様々な小泉家との交友エピソードからは、フェラーズのハーンに対する敬愛ぶりを感じとることができる。このようなフェラーズと小泉家との関わり方を考慮にいれると、上に記した平川の考察は的を射ている。

ここで示した二つの事例は、共感と共生を以って行われたハーンと柳の異文化理解が、一度は失われかけた朝鮮の歴史的建造物である光化門と、日本人の心の象徴である天皇制という二つの伝統を救った彼らの功績の一つといえる。

ハーンと柳の生きた時代は、世界が異国と異文化の狭間で激しく揺れた時代であった。そんな激動の時勢が過ぎ、迎えた21世紀、世界は他国との協調が求められる国際化の時代へと移り変わった。航空産業のめざましい発達は、人々を異国へ運ぶことを容易にし、それに伴い、異文化交流も盛んに行われるようになった。しかし、このような時代においても、世界には未だ差別や偏見の問題が蔓延り、国際社会を生きる我々はそれらから目をそらせるわけにはいかない。異文化理解のあるべき姿を、文芸活動を以って発信したハーンと柳の功績は、現在、そして後世に、異文化交流の一つの指針として、着目されるべきものといえるのである。

注

1 Nina H.Kennard, *Lafcadio Hearn*, Eveleigh Nash, 1912, pp. 161-162

2 Lafcadio Hearn, *Lafcadio Hearn American Writings*, The Library of America, 2009, p. 748

3 Edward Larocque Tinker, *Lafcadio Hearn's American Days*, 1925, p. 328

4 彫刻家として活動する傍ら，朝鮮の美術工芸の収集と研究に打ち込んだ，柳が最も信頼を置いていた親友の一人。浅川の朝鮮文化と朝鮮人に対する愛の籠った姿勢に，柳は深く共鳴した。

5 柳宗悦『柳宗悦全集第６巻』筑摩書房，1981, p. 637

6 *Ibid*., p. 24

7 大東俊一『ラフカディオ・ハーンの思想と文学』彩流社，2004, pp. 186-191

8 柳宗悦『柳宗悦全集第18巻』筑摩書房，1982, p. 60

9 *Ibid*., p. 19

10 阿満利麿『柳宗悦 美の菩薩』リブロポート，1987, p. 179

11 Lafcadio Hearn, *Glimpses of Unfamiliar Japan*, Charles E, Tuttle Co., 1996, p 10

12 西田幾太郎（1870-1945）は，田部隆次著『小泉八雲』（北星堂1980）の序文において，この哲学を「ヘルン氏は万物の背後に心霊の活動を見るというような一種深い神秘思想を抱いた文学者であった。かれは我々の単純なる感覚や感情の奥に過去幾千年来の生の脈拍を感じたのみならず，肉体的表情の一々の上にも祖先来幾世

の霊の活動を見た。」と解説している。

[13] Lafcadio Hearn, *Interpretation of Literature volume 2*, Dodd, Mead and Company, 1922, p. 90

[14] 柳宗悦『柳宗悦全集第 2 巻』筑摩書房, 1981, pp. 234-267

[15] *Ibid*., p. 243

[16] *Ibid*., p. 241

[17] Lafcadio Hearn, *Exotics and Retrospectives*, ICG Muse, Inc., 2001, p. 159

[18] *Ibid*., p. 169

[19] Lafcadio Hearn, *Gleanings in Buddha-Fields*, Houghton, Mifflin & Co., 1897, p. 212

[20] *Ibid*., p. 226

[21] 柳宗悦『柳宗悦全集第 2 巻』筑摩書房, 1981, pp. 127

[22] *Ibid*., p. 241

[23] Lafcadio Hearn, *Interpretations of Literature volume 2*, Dodd, Mead and Company, 1922, p. 370

[24] Lafcadio Hearn, *Karma & Other Essays*, The Harper Library, 1924, pp. 167-68

[25] 柳宗悦『柳宗悦全集第 2 巻』筑摩書房, 1981, p. 6

[26] 中見真理『柳宗悦－「複合の美」の理想』岩波書店, 2013, p. 42

[27] 柳が創始した, 美術品ではない無名の職人が手掛ける日常雑器や日用品の中に美を見出し, それらを世に広く紹介することに努めた活動。

[28] 柳宗悦『柳宗悦全集第 6 巻』筑摩書房, 1981, p. 146

[29] 山極晃・中村政則編『資料日本占領1天皇制』大月書店, 1990, p. 515

[30] 東野真『昭和天皇 二つの「独白録」』日本放送出版協会, 1998, p. 33

[31] 平川祐弘『平和の海と戦いの海　二・二六事件から「人間宣言」まで』新潮社, 1983, p. 216

[32] 小泉時『ヘルンと私』恒文社, 1990, pp. 202-212